法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-30

講演要旨　「ひきこもり」問題とキャリアデザインの課題

OGI, Naoki / 尾木, 直樹

(出版者 / Publisher)
日本キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
キャリアデザイン研究 / キャリアデザイン研究
(開始ページ / Start Page)
43
(終了ページ / End Page)
52
(発行年 / Year)
2005-08-31

Hosei University Repository

《講演要旨》

「ひきこもり」問題とキャリアデザインの課題

尾木　直樹

1　はじめに

（1）三つの視座

「ひきこもり」とキャリアデザインの問題は、決してネガティブな関係ではなくて、今日を生きるすべての子ども・青年にとって共通の関心事が内包されており、きわめて普遍的で重要な課題になっています。

報告への基本的な視座ということで、はじめに三つのポイントについて、お話ししておきます。「ひきこもり」問題というのは、子ども・青年だけの問題ではありません。大人と現代社会を象徴する現象です。この「大人と現代社会の問題」である「ひきこもり」に、私がどういう経緯で関わっていったのかということ。これが、報告の一つめです。その際どのような調査活動を展開していったのか、「ひきこもり」との出会いや調査・支援活動についての報告です。

二つめは、いったい「ひきこもり」とは何かという本質の問題です。これについてはきちんと定義づけておかなくてはならないと思っています。なぜなら、最近では、ニートとの混同が起きているからです。主に、テレビメディアの責任ですが、これらは分別して考えないと効果的な支援や解決策につながりません。

最後に、「ひきこもり」の解決に関して、キャリアデザインが担うべき課題は何かという問題です。

2　「ひきこもり」の実態調査から

（1）「ひきこもり」との出会い

最初に報告したいのは、私と「ひきこもり」問題との出会いについてです。

当初は、私も「ひきこもり」についてはあまり関心は高くありませんでした。小・中・高の子どもたちの問題、中でも少年非行、いじめ、学級崩壊、子育てなど教育現場で日々発生している臨床教育問題全般について、全国各地で調査や聞き取

Hosei University Repository

りをしたり、講演活動をしたりするのが、私の活動スタイルでした。1997年から98年のころ、「学級崩壊」の問題で、北海道から沖縄まで、全国200箇所での聞き取り調査を行っていました。そのころ、講演後の懇談や聞き取りの際などに、「うちの息子が、実は『ひきこもり』なのです」という具合に、世話人の方や調査でお伺いした先の方々が、「ひきこもり」という言葉をしばしば口に出すようになってきました。そこで、「あれ？『ひきこもり』って、いったい何なのだろう」という程度の関心は持っていたものの、当時は、私の研究対象ではありませんでした。

本格的にこの問題に乗り出したのは、2000年の7月のことです。ある団体の全国研修会に呼ばれたときのことでした。この団体では、教会長と称す方が、それぞれ5,000所帯ぐらいの地域の生活を把握しておられる全国規模の組織で、大きな団体です。

「教育問題を語る」ということで、その全国の教会長さんの研修会に伺いました。その時の講師は、僕ともう一人は精神科医の斎藤環氏だったのです。つまり、主催者側の主な関心は、「ひきこもり」問題のようでした。質疑応答も、「ひきこもり」の問題に集中しました。そこで、私は本当に何気なく、「みなさんのなかで、自分の周辺に『ひきこもり』の青年を抱えている方は、手を挙げてもらえますか」と、会場に質問してみたのですね。そうしますと、参加者70数名のうちの、ほとんどの方の手が挙がったわけです。全国から集まった代表の人たちですから、私は、「これは、全国的な問題にまで、すでに広がっているんだ」と、大きな衝撃を受けたことを、今でもはっきりと覚えています。

当時は全国で、どれくらいの人が「ひきこもり」状態なのか、「ひきこもり」の青年たちは、どういう悩みを抱え、家族や関係者の人々は、どんなことに苦しんでいるのか、また、当事者の年齢や性別、「ひきこもり」に入った年や期間といった基本的な事実が、量的にも質的にも全然把握されていない時代でした。私は、解釈だけの評論家は嫌だと思って活動していましたので、「ひきこもり」の問題に関しても、フィールドワークを通して取り組まざるを得ないと考えました。そんないきさつから「ひきこもり」問題について調査を開始したのです。

（2）調査自体の困難さ

しかし、いざはじめようとしても、いったいどこに「ひきこもり」の人がいるのか、どういう調査をしたらいいのか、これまで実施してきた調査とは異なって、これらの大前提そのものに関してまったく見当がつきませんでした。仕方がないので、最初は一般の市民の方々に、「ひきこもり」をどのようにとらえているのか、その人たちの周りには、どれくらいの「ひきこもり」の人がいるのか「社会意識調査」として、外堀から疑問を埋めていくように進めました。2000年の11月、12月に調査票を完成させ、全国20都道府県、約3,000人の市民を対象とするアンケート調査を実施しました。

この調査を行った段階では、「ひきこもり」という言葉の定義は、意図的にしないで、「あなたがひきこもりだと思う人が身の回りにいますか」とあいまいな質問にしたのですが、問題の輪郭が少しずつ鮮明になってきました。私自身も、どこの誰が「ひきこもり」の実態をリアルに把握しているのか、ようやくつかめました。それは、保健婦（当時）でした。とくに地方の保健婦は、問題をよく把握していました。とくに長野県は全国でも最も先駆的でした。なぜなら、長野県は、地域医療活動が進んでおり、「どこの誰々さんの息子さんが、『ひきこもり』だ」とか、生活の実態をかなり正確につかんでいたからです。そこで、長野県の保健婦さんにお願いして、「保健婦対象調査」と「一般市民対象調査」の、２種類のアンケートを実施してみました。その結果、「ひきこもり」の青年た

Hosei University Repository

ちの特性や「今家族がどんな状態に置かれてるのか」実態が浮き彫りになってきました。

私の専門領域ではなく、大変な苦労が伴いました。これまでかかわったことがない新しい分野の人たちとの協力、協働が不可欠でした。私の調査研究は、その結果を記者会見などを通して公に発表して、メディアを介して流すという手法をとっていますが、このときもそうしました。すると、大きな反響を呼びました。民放でもNHKでもその日のテレビニュースで報じられました。このような経緯から、「ひきこもり」問題に深くかかわることになったわけです。それ以降は、「何とか解決しなくてはいけない」という強い思いもあって、「ひきこもり」を生まない教育システムや実践をどう構築していけばよいのか、自分の専門である教育の領域に引き寄せて考えるようになりました。「ひきこもり」のご家族やその人たちが組織する「親の会」とも親しくなりましたので、アンケート調査はダイレクトに行えるようになっていきました。

（3）「ひきこもり」を抱える家族への調査から

2002年の1月から2月にかけて、今度は「ひきこもり」家族600世帯を対象に、全国20都道府県でアンケート調査を実施しました。実は最初は、12 頁だての冊子のようなぶ厚い調査票を作成したのです。これを「ひきこもり親の会」の代表に検討してもらったところ、「これではダメだ。こんな膨大な質問に答えられるわけがない」、「だいたい『ひきこもり』の子どもを抱えた親は、親自身も苦しんでいるのだと理解しなくてはいけない」と、怒られてしまいました。そこで、「みなさんのことを支援する」という内容に限定し、調査項目を絞り込みました。私には、若干の不満は残ったのですが、そもそもが何のための調査なのかといえば、やはり問題の解決に寄与しなくては全く意味がないのです。研究の成果をどれだけあげても当事者には意味がないと。こうして、「ひきこもり問題の解決と支援のためのアンケート」を家族の方にお願いすることができたのです。

本調査では、「ひきこもり」についての定義は正確にしました。つまり、「特に精神的な障害がきっかけではなく、自宅や自室に、6ヶ月以上長期にわたってひきこもっていて、社会参加できないでいる、中学校卒業段階以降の青年」としたのです。定義そのものは、斎藤環さんと、ほとんど同じで重なっています。

この調査を通して、私が痛感させられたことは、社会からひきこもっている人が対象であるために、調査自体が困難を極めたことです。苦悩があまりにも深いために、データとして数字には表れにくい、そして分析も難しいということでした。

「困っていることはあるけれど、今は書けません」という方までいるのです。書く意志がないのではなくて、「頭がいっぱいになってしまって苦しくて書けない」という叫びです。27歳の娘をもつ50代の母親でした。結局、13種類にも及ぶ「今後の支援の希望」という調査項目は、すべて白紙でした。また、22 歳の息子をもつ父親は、「兄弟や親も社会との関係で苦しみ、兄弟の結婚問題にまで影響している」と嘆いています。地方に行くほど、圧力も大きいようです。「親たちも、死ぬほど苦悩している」「何とかして欲しい」「何をどうして欲しいのかも、よくわからない」と、19歳の息子をもつ40代の母親は訴えています。別の30歳の息子をもつ50代の母親は、「田舎のせいで、相談する機関がなく、探して探して12年、いまだに適切な機関がありません。悲しいです」と訴えています。この方は、九州ですが、地方の苦労は想像を絶しています。

「社会的ひきこもりが、いつまで続くのかという不安感があり、明るく穏やかに接していきたいと思っていても、自信がもてません」と、26歳の息子がひきこもっている 50 代の母親は自分の弱さと状況の厳しさを正直に吐露しています。さらに、親が病気になると、悲惨です。26歳の「ひき

Hosei University Repository

こもり」の息子をもつ50代の母親は、その心情を、次のように記しています。

「主人が癌で死に、私も癌になり、75歳になる母と二人三脚です。10年以上『ひきこもり』をされていると、先々のことがすごく不安になってきます。」

むろんこうした困難に対して、家族は、オロオロとしているばかりではありません。「精神科の医師にかかった」という人は、62.2%います。保健所・保健センターを訪れたという方は、31.3%。しかし、「先生がわかってくれなくて、事務的で、話をじっくり聞こうともせず、待つのが長く、診療は二、三分。薬だけたくさんくれて、料金がとても高い」と不満を述べる人もいます。もちろん、医師にも言い分があるわけです。お母さんを診ても、保険点数にはならない、医療行為にならないという基本的な問題があります。

不満を述べる人は、「ひきこもり」の家族の3割にも達しています。専門機関の評判は、概してよくありません。しかし、専門機関には不満を持つ人でも、素人の集まりである「親の会」に対しては、63.3%もの人が「役に立った」と満足しています。

「ひきこもり」というのは、精神的な病ではないのです。まさしく「ひきこもっている」という状況を示す言葉です。ですから、親たちも、治療行為よりも人とのネットワークを求めているようです。これが大きな特徴です。ですから、「ひきこもり」からの脱出に際して、家族にとって必要な支援は、必ずしも高度な専門性を備えた医療や保健施設ではなく、本音で情報交換でき、お互いになぐさめ合い共感し合い支え合える仲間です。そのような交流の場をこそ求めているのだと理解できました。このことは、データにもはっきりと表れました。交流を通して得られる元気や勇気、そして脱出への希望を求めているのです。

国民年金の保険料免除制度を特設したり、国民健康保険の扶養家族扱いを工夫したり、行政による直接的な経済支援や福祉の充実、就労に向けたシステムづくりを急ぐべきだということも見えてきました。

同時に、私たち一人ひとりにもできることがあるはずです。「社会的ひきこもり」からの「脱出」のイメージを尋ねるべく、「自分の息子や娘が、どうなればひきこもりから脱出できたと思いますか」という質問項目を設けました。結果には、本当に驚かされました。

「親しい友人関係ができること」が断然トップで、66.8%でした。私は、「就労できること」だろうと予想していたのですが、そうではなかったのです。いかにも切実な課題と思われがちな「経済的自立」は、60.2%。「生活的自立」は、53.2%でした。4番目は、「人を信じることができること」で、48.7%です。つまり、いかに対人関係を求めているのかが理解できます。

これらは、もちろん「ひきこもり」青年たちの固有の要求ではありません。「ひきこもり」青年や親が抱える苦悩は、実はすべての人が共通して抱えている、きわめて今日的課題ではないでしょうか。ひきこもりの家族が直面している問題への、具体的で素早い対応と同時に、長いスパンとひろい視野をもって、人間同士が豊かな信頼関係を構築できる社会をめざしていかなくてはいけないのだろうと思います。

3　「ひきこもり」とは何か

(1)「ひきこもり」のアウトライン

少し基本的なことに戻ります。「ひきこもり」とは、いったい何かということです。

「ひきこもり」問題で全国調査をして結果を発表したのは、日本では、私の研究所が最初でした。その後に、厚生労働省では、プロジェクトチームを発足させて、研究を重ねていきました。こうし

Hosei University Repository

て、厚労省が最終的なガイドラインを出したのは、2002年7月28日です。かなり分厚い報告書です。今日、日本の「ひきこもり」対策は、行政的にはこのガイドラインに基づいています。

厚生労働省の「ひきこもり」の定義は、相当悩んだようですが、一言でいうと、「自宅に引きこもって、社会参加しないという共通の行動をとっている多様な状態」といった内容です。もう少し詳しく引用すると、次のように述べています。

「ひきこもりは、単一の疾患や障害の概念ではありません。ひきこもりは様々な要因によって社会的な参加の場面がせばまり、就労や就学など、自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態のことを指します。これは、なにも特別な現象ではありません。何らかの理由で周囲の環境に適応できにくくなった時にひきこもるということがありうるのです。このようなひきこもりの中には、生物学的な要因が強く関与していて、適応に困難を感じたり、ひきこもりをはじめたという見方をすると、理解しやすい状態もありますし、逆に環境の側に強いストレスがあって、ひきこもりという状態に陥っていると考えた方が理解しやすい状態もあります。つまり、ひきこもりとは病名ではなく、ましてや単一の疾患ではありません。また、いじめのせい、家族関係のせい、病気のせいと、一つの原因でひきこもりが生じるわけではありません。生物学的要因、心理的要因、社会的要因などが、さまざまにからみあって、ひきこもりという現象を生むのです。」

まさにその通りです。ちなみに、『社会的ひきこもり』を書いた斎藤環氏の定義では、「20歳代後半までに問題化し、6ヶ月以上自宅に引きこもって、社会参加しない状態が持続しており、他の精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」としています。この本が出版されたのは1998年のことでした。

私も「ひきこもり」600世帯とその家族、そして本人たち数十人に面接して、やはりその通りだと実感しました。しかし、ひきこもり状態が、20年も続いていたり、10年間ひきこもって、筆談しかしていない女性がいたりするのです。そうすると、精神疾患が出てくるケースもあります。つまり、きっかけは精神的な疾患でなくても、そのような状態が長期間続くことによって、病が発症してくることもあるのです。そうした場合には、回復にも、相当な困難が伴います。早期に脱出することが必要です。鬱病になっている人、被害妄想の人、強迫症状の人、対人不安症や、いろんな身体症状が出ていて困難が大きいのです。

この「ひきこもり」に関して、私はブラジル、カナダ、あるいはオーストラリアなどの海外のテレビ局からも取材を受けました。そういうときには、私はいつも「逆取材」を試みることにしています。「あなたの国では、どうですか」と。すると、みなさん、「ない」「ないからこそ、日本に取材に来た」と言うんですね。ですから、「Hikikomori」は国際共通語として、海外でも通用している。ただ、海外でも「社会的逃避行動」(social withdrawal)はあるはずです。その意味では「ひきこもり」は存在するわけです。ただし、日本のようには、まだ深刻な社会問題化はしていない。だから、「ひきこもりは、諸外国にはない」と一面的に決めつけるのは、間違いです。

基本的なことですが、「ひきこもり」は、厚労省のデータからは41万人ぐらいと読み取れますが、診察や相談に来た人のデータをもとにはじいているのでかなり少なく出ています。

もうひとつ、重要な事実は、「ひきこもり」は、圧倒的に男性の問題だという点です。80%が男性です。厚生労働省の調査では、83%。私の臨床教育研究所「虹」の調査でも8割。親の会の調査でも8割ぐらい。他にもいくつか調査はあるのですが、不思議なことに、どの調査でも、だいたい同じです。つまり、「ひきこもり」は男子で、長男が圧倒的に多い。これは、やはり歴史的・文化的な問題を含んでいるようです。

Hosei University Repository

4 「ひきこもり」問題とキャリアデザインの課題

ここでは、「ひきこもり」問題とキャリアデザインの課題について話を進めます。いくつかに整理して捉えてみようと思います。

(1) 生涯発達保障の観点からとらえた、「ひきこもり」青年の特性と発達課題

「ひきこもり」青年、五つの特性

一つは、生涯発達保障の観点からとらえることができるという特性です。つまり「ひきこもり」青年は、どういう発達課題を抱えているのかという問題です。

まず言えることは、「ひきこもり」の青年は、思春期の精神発達の問題を、そのまま抱え込んでしまっているということです。斎藤環氏の著書、『社会的ひきこもり』のサブタイトルは「終わらない思春期」とあります。発達論からいえば、12歳から17歳ぐらいを「思春期」と言うのですが、その思春期が、30歳になっても40歳になっても終わっていない、「精神的去勢が完了していない」と精神科の医師は言います。「社会とはこういうもので、それとどう付き合っていくか、折り合いをつけていくか」ということが、できなくなっているというのです。

「ひきこもり」青年は、総じて学力は高いようです。僕が面接したのは、ほとんどが大卒で、早稲田とか慶応とか、そういう層です。まるで「中学生がそのまま年をとった」ような方と対面している感じでした。とても純粋なのです。例えば、東京の大学を卒業した方は、ある会社の支店で営業成績はトップ。エリートコースを進むかと期待されました。ところが、2年3年と勤めているうちに、自分が販売している商品の「儲けの仕組み」に気づいた。すると、「これは儲けすぎじゃないのか」と、思いはじめたのです。もっと安くすれば、消費者に喜ばれるのに、と。営業の全体が見えてきたときに、「これはなんか変だ」と思い始めると、仕事への意欲がなくなってしまったのです。競争社会ですから、成績もあれよあれよという間に下がっていきました。係長や課長からは、「何やっているんだ」とプレッシャーをかけられる。そのうちに苦しくなってきて、ついには、出社できなくなってしまったのです。こうして、ひきこもってしまった。例えばこんな経緯です。どの「ひきこもり」の例もよく似ています。

二つめには、自己肯定心情が異常に低いという特徴があります。

三つめには、「人間関係力」というか、門脇厚司氏の『子どもの社会力』(岩波新書)という素敵な本がありますが、そこで強調されている「社会力」の欠如の問題。自己決定能力というか、自己決定の意志と表現した方がいいのかもしれませんが、それらが極めて弱いという特徴があります。一般化して言うと、コミュニケーション能力の問題ということになるでしょうか。

四つめに、根強い人間不信を抱えているという問題があります。どの調査を見ても、3割をこえる方がいじめを経験しています。ただし、斎藤環氏によると、精神医学的には「いじめのトラウマ」と「ひきこもり」との因果関係はないようです。治療のアプローチが違うようです。しかし、教育的な領域から見ますと、両者には重なる部分が多いように思います。これは、丁寧に議論しなくてはいけないと思います。

最後の五つめは、キャリアイメージの希薄さの問題です。勤労観・職業観が希薄で、将来への希望もないという特徴があります。

二つの発達課題

では、何が発達課題とされるべきでしょうか。大きく二つ挙げられます。

一つは、思春期・青年期の発達保障や精神的・社会的自立のプログラムを、いかに確立するのかという課題です。学校でも、家庭でも、地域でも、

Hosei University Repository

社会全体でも、いま切実に求められています。

もう一つは、コミュニケーション不安や不全から、いかに彼らを解放するのかという課題です。これは、今日のすべての子ども・青年に共通した特性であり、発達課題になっています。「ひきこもり」の青年だけに限った問題ではありません。

関西のある大学の学園祭に講演に伺ったときにいただいた資料なのですが、学生のこんな手記がありました。

「入学直後のサークル勧誘がうっとうしくて、避け続けていた。コンパの誘いも断っていました。新しい生活になれることに頭がいっぱいでした。ようやく大学生活になれてきた頃、講義の教室にはいると、親しそうに話すグループがいくつかできあがっていて、自分は輪の外にいるような感覚に襲われました。みんないつの間に仲良くなったんだろう、疎外感を感じながら講義を終え、教室の外に出ると、あれほどにぎやかだったサークル勧誘の時期も終わっていて、上級生から声をかけられる機会もなくなってしまいました。学食に行き、空いている席をみつけてランチを食べていると、隣の席で楽しそうにしゃべっている学生の声が耳に入ってきます。自分以外の全員が楽しそうに会話をしているような気がして、恐怖がつのってきました。心の中に喪失感がひろがってゆくような、妙な気持ちになりました。大学に通っても、誰とも会話をすることもないまま、何日か経過しました。だんだん朝起きるのが辛くなってきて、講義を休むようになりました。昼になって起き出して、なんとなくテレビゲームをしていたら、夜になっていました。そうやって何日か過ごしていたら、ある日まったく大学に行かなくなってしまっていた自分に気がついて、ひどく怯えるようになりました。大学に通わない自分、一体自分は何をしているのか、このまま社会から逸脱してしまうんだろうか、部屋の真ん中で膝を抱えて体育座りをして、しずかに涙を流すことしかできなくなってしまいました。」

こういう姿が、大学生の場合では相当多いのではないかと思います。「ひきこもり」青年が抱えている発達上の課題は、実は今日のすべての学生に共通した課題であって、決して特異な問題ではないのです。したがって「ひきこもり」の予備軍は大量に控えているといえます。

（2）学校におけるキャリア教育への要求と課題

ご承知のように、2004 年は、「キャリア教育元年」と称されました。どうして、このような状況に変化してきたのでしょうか。

キャリア教育求める社会の必然性

一つは、社会的要求からの側面です。

フリーターは、417 万人と言われています。ニートが 52 万人、データの取り方によっては 72 万人と言われたりもします。「ひきこもり」は少なくとも41万人から、多いと80万人をこえています。離職率の増加現象もあります。むろん、離職そのものが問題だとは認識していませんが、3 年以内に離職する者が、中卒で７割、高卒で５割、大卒で３割と「七五三」といわれる状況があります。1990 年代後半から指摘されてはいましたが、2000 年に入り、とくにこの 2, 3 年は社会問題として大きくクローズアップされてきました。それだけ社会的なリスクが高くなってきた証拠でしょう。個人消費の伸びも鈍化し、経済成長率も落ち込んでいる。この背後の理由の一つが、ニートやフリーター、「ひきこもり」の青年たちの増大ではないかというのです。だから狭い意味でもキャリア教育に力を注がざるを得ない状況です。

もうひとつは、「教育界自身の必然性」という側面があります。教育界にとっても、今日「キャリア教育」は重要な課題になっています。

これまでの学歴競争の社会では、能力主義に基づく「手段としての学習」が主流でした。しかし、

Hosei University Repository

これが、バブルの崩壊をきっかけに破綻しました。ですから、その後には、あらたな学習の動機づけ、つまり学習はなんのためにするのかという目的が必要になってきた。今日では、「いい高校に入って、いい大学に行って、一流企業に勤めなきゃダメでしょ」などという親は少なくなった。地方でも時間の問題で通用しなくなっていくはずです。そういう状況の下で、「なんのために学習するのか」という問いを、小学校１年生でも発するように変化してきているのです。これは、今日の教育状況の大きな特徴です。この問いにどう答えればよいのか、教育現場は苦悩しています。自分自身もわからないと、先生方も感じているわけですから。しかし、現場は、数値目標を掲げた計測可能な狭い「学力」競争に駆り立てられているのです。ゆとり教育への反発と学力低下批判から単純な詰め込み教育へ揺り戻しているのです。そこに、これらの新しい矛盾を統一的に克服し、解決する教育改革の軸としての「キャリア教育」が求められる必然性があるように思うのです。

キャリア教育の六つの課題

それでは、キャリア教育の課題はなにか。

一つは、労働における主体者育成のための総合的施策の確立という課題があるように思います。「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」（2004年１月）の報告書が出されましたが、最後までその内容を読んでいくと、キャリアカウンセリング、キャリアカウンセラーの養成に、かなり焦点が当てられている。現場では、「心理主義」に陥る危険はないのか、一定の警戒もしておくべきだと思います。また、「自己管理主義」に陥ることのない視点も持つべきです。さらに言えば、狭い意味での「体験主義」に陥ってもいけない。「協力者会議」の報告書でも、キャリア教育の実践は、学校の「全教育活動を通して」と強調されています。キャリア教育の中身は、今後、慎重に開発していく必要があります。

二つめの問題は、小・中・高の、画一化された学校文化、学校的価値や評定・評価の見直しが求められるということです。学校の主役としての児童・生徒の学校参加を、今後どのように進めていくのか重要な課題です。

三つめは、各学校段階における、入試システムが引き起こす発達阻害の問題、つまり評価や進路・進学指導の問題があります。講義のなかで、学生に書かせると、「中学校生活も高校生活も、評価システムに縛られていた」と言います。とくに推薦入試を考える生徒は、ずっとよい子を演じています。その苦悩がつづられる文章を読むと、自分をつくり、よい子を演じるなかで、発達的な問題を抱えてしまう学生がいるのではないかと心配になります。

四つめには、学力の低下が言われていますが、「学力の二極化」の問題です。子どもたちの学習意欲そのものの低下と、「二極化」の問題が、非常に重要だと思います。

五つめには、いじめのトラウマをどのように癒すのかという問題。

最後の六つめは、大学における「実践的キャリア教育」を早期に確立するという課題です。これは、かなり進みはじめているように思います。私の授業では、講義を通して「自己のとらえ直し」、「学生の育て直し」、「生きるコアの形成」、「人間への信頼感の獲得」等のサポートをするという側面を重視しています。そのための「学び合い」「育ち合い」の関係づくりを授業展開の中心に置いています。

５ 「ひきこもり」に対する社会的認知に関する問題

実は第１回の「ひきこもり」に関する意識調査の際に、市民が「ひきこもり」に対する親近感をどの程度持っているかを聞いてみたのです。すると、「ひきこもり」に対しては、非常に共感的なコメントが多かったのです。８割ぐらいは、「ひきこ

Hosei University Repository

もりたい気持ちがわかる」と答えていたのです。「不登校」や「学級崩壊」問題を調査をした際には、否定的な回答が多かったのに、「ひきこもり」に対しては予想以上に理解者が多いという結果に、私も驚きました。中身を見ますと、「私は毎日会社に行っているけれども、会社に引きこもっているようなものです」とか。そういう共感的なとらえ方でした。

ところが、今、いろんな少年事件が起きた直後ということもあり、またニートの問題が盛んに議論されるなかで、「ひきこもり」の青年に対しても、それは一面的に「怠け」だというバッシングが始まったように思います。ニート・バッシングの延長としての「ひきこもりバッシング」の開始です。これは重大な問題だと思います。

殺人事件と「ひきこもり」との関係では、佐賀県で、2000年の5月にバスジャック事件が発生しました。先日は水戸市で、19歳の少年が両親を殺害する事件が起きました。その少し後では、土浦でも同様の事件がありました。いずれも加害青年は「ひきこもり」でした。ただし、誤解しないでほしいのは、100万人もの「ひきこもり」青年がいれば、仮にその中の一人二人が事件を起こしたとしても、パーセンテージとしては、一般の殺人事件よりも、数値は低いはずです。「ひきこもりの青年は危険」という、とんでもない誤解が広がっては困ります。

6　国及び地方自治体・企業・ＮＰＯ等の課題

最後になりますが、国、地方自治体、企業、ＮＰＯ等にとっての課題は何か、特にポイントになる問題だけ申し上げておきます。

ＮＰＯなどによる多様な「居場所づくり」が、この２～３年全国各地に広がってきたように思います。

私自身も鹿児島県で、施設の立ち上げのセレモニーに立ち会ったのですが、地方の篤志家の方たちや、それこそ血みどろになって苦しんでいる親たちが力を合わせて、不登校の子どものたまり場づくりと同じように、「ひきこもり」の青年たちの居場所を、各地でつくりはじめています。そういう状況のなかで、ニート問題が注目されてきたからでしょうが、政府も本格的に支援策に取り組みはじめました。この12月（2004年）の補正予算では、「若者自立塾」を全国20カ所で開設するということです。新たに14億の予算を付けました。

こういう素早い動きは、初めてのことです。ようやく政治家のなかでも、「社会的なリスクも大きくなるから、とにかく今、手を打っておかないと」という危機感が出てきたのではないかと思います。ただ、それでも国際的な比較で言えば、日本政府が投入している資金は、まだまだ少額です。「若者がきちんと働かないのは、怠け、わがままだ」といった捉え方が根強いからだと思います。

「ひきこもり」の家族支援をどう具体化するのか急ぐ必要があります。「保険点数」の問題など、医師の側からすれば、「ひきこもり」の青年を抱える家族の相談に応じても、診察として請求できるように改善するといった施策が、いま重要だと思います。思春期の精神科の医師の数は、政府のデータをみても、全国に200人ぐらいしかいない。しかし、実際に現場に出ている精神科の医師は、「そんなにいない。20人から30人位しかいない」と言います。思春期の精神医療分野は、盲点になっているのです。こういう貧弱な体制をどうするかということも重要な課題です。

「職親」制度を

私は、以前から「ひきこもり」の「職親制度」をつくるべきだと提案しています。障害を持った人を採用する基準は、法律で決まっています。それと同じように、「ひきこもり」青年を対象とした「職親制度」のようなものが必要なのではないか。むろん企業も、経営的なゆとりはなくなってきています。それは、理解できます。しかし、果たし

Hosei University Repository

て何もしなくても良いのかとも思います。「職親」制度を採用した企業に対しては、国として例えば100 万円の援助をするとか、いろいろと方法はあるはずです。

若者の就職率の低さの改善という問題もあります。現状は、子どもや青年の労働権や生活権、発達の権利を奪っている状況です。雇用における「社会性」や「公共性」という問題を、企業は社会的責任としても考える必要があるのではないでしょうか。もちろん企業だけの責任に帰すのではなくて、一人ひとりが参加した社会的なサポートが必要になります。

選挙権の問題。突飛に思われるかもしれませんが、国際的には18歳選挙権が普通です。もっと「地球市民」として若者をどう育てていくのか、若者を一人の市民として扱い、育てる教育を構想し、追求していくべきと思います。

最後に、生涯学習社会をどう展望し、構築していくのかという大きなビジョンも必要です。就労後の社会生活、地域生活、家庭生活をどう充実させるのかという課題です。「ひきこもり」の問題を調査してきて気づいたことは、退職後にひきこもる男性も多いことです。「先生、困っているんです」と言うので、「息子さんは、おいくつですか」と聞くと、「いえ、主人ですが…」という具合です。「退職後のひきこもり」や「倒産によるひきこもり」の現実もあるのです。

私たちは生涯、死ぬ瞬間まで発達していくのだととらえ、生涯の発達をどうデザインしていけるのか、大切な課題になっているように思います。

付記

本稿は、学会での口頭発表のテープ起こしをもとにしたものです。したがって、レジュメや資料の引用・報告が欠落し、全体的に厳密さに欠けている点をご了解下さい。

尚、必要な方、詳細を知りたい方は、「ひきこもり」に関する臨床教育研究所「虹」が実施した調査リポートをご参照ください。

（おぎ・なおき　教育評論家、臨床教育相談研究所「虹」所長）